

「豊かな東アジア、ダイナミックな東アジア—人文・経済貿易・技術の交流」

フォーラムの会議実録

徐興慶

(台湾・中国文化大学学長)

一 フォーラム背景の趣旨

台北陽明山にある中国文化大学「東アジア人文社会科学研究院」は2019年、筆者の呼びかけによって新たに創立された研究機関である。当研究院の設立と同時に、国内外から多数の研究者を招いて10月4～5日の2日間にわたって国際フォーラム「東亞人文社會科學研究的新地平線—人物、文化、思想、海洋與經濟的交匯」が開かれた。

当研究院の成立当初、積極的に各国の重要な東アジア学術研究機構とのMOU締結、署名を進め、教師・研究員と院生の相互交流を基礎として、東アジア研究の豊富な資源を積み上げていくことを目指している。2019年の開幕当時、中国大陸の吉林大学東北アジア研究院・南開大学日本研院・東北師範大学東アジア研究院・浙江工商大学東方言語文化学院、日本の二松学舎大学東アジア学術総合研究所・長崎大学多文化社会学研究科・早稲田大学社会科学総合学術院、韓国の釜慶大学人文社会科学研究所・建国大学KU中国研究院・高麗大学Global日本研究院・韓国海洋大学国際海洋問題研究所、

ベトナムのベトナム社会科学院漢喃研究院、そして2020年には、神戸大学大学院文学研究科とそれぞれ調印し、将来の各領域研究の多元的学術交流を促進することを目的としている。

昨年に引き続き、今年も東アジア学国際フォーラムは、東アジア人文社会科学研究院の主催によって、11月9日から10日にかけて、中国文化大学の3箇所の会場で盛大に行われた。東アジアは古くから人と文化の交流が盛んな地域であり、その形態は豊かな文化と芸術、実体経済と貿易、科学技術の交流を含んでいる。各地域間の緊密な交流のプロセスは、東アジアの繁栄と発展を促進するプロセスでもある。「豊かな東アジア、ダイナミックな東アジア—人文・経済貿易・技術の交流」をテーマにした2020年の同フォーラムは、国際的かつ学際的なアプローチを基本として、古代から現代までの東アジアにおける形而上学的な観点からの「豊かさ」の意味合いを探り、将来の東アジアにおける「ダイナミック」な発展趨勢の展望を目的として開催した。台湾、中国大陸、日本、韓国に加えて、東南アジア諸国も会議の重要な研究対象となっている。特に分野横断的な学術研究を通じて、経済、政治、社会、文化、言語、文学、宗教、海洋、芸術のあらゆる次元において多面的に検討する場を提供することを目指すものである。

今回は新型コロナウイルス感染症対策による各国の入国制限を踏まえ、会場及びオンラインの同時開催という方式で進行された。

二 基調講演の主要内容

本会議は五つの基調講演から構成され、主要内容は以下の通りである。

1. 東北師範大学・韓東育副学長は「東アジア世界をめぐる地縁

政治の構造」を演題として、前近代から近現代までの東アジア世界が前後して経験した三種の地域秩序について論じた。即ち中華礼楽の価値を中心にした「落差—安定」構造、日本の植民拡張政策が主導した「落差—震動」構造、第二次大戦後のアメリカが欧米価値の優越論を基礎に打ち立てた「落差—権力」構造である。

2. 高麗大学漢文学系・沈慶昊教授の演題は「韓国の科挙および韓国文化」である。科挙に現われた漢文の文体また問題は、口語による生活体系と、漢文表現による文字生活との間に、長期にわたってたえず矛盾と背離をもたらした。科挙を経て官職に就いた知識階層の著述と出版には、両極の機能があった。知識を拡大する方向に機能した一方で、他者を排斥、差別する逆向きの機能である。

3. 神戸大学人文学研究所・奥村弘教授の演題は「21世紀の人文科学をめぐる地域の歴史資料学の作用—日本・台湾の災害資料保存活動から考える」で、人文科学からこのような状況に対応するものとして、災害の記憶を保存し、これを地域社会の歴史として未来に引き継ぐため、地域の歴史資料と同時代の災害資料を保存する多様な活動と研究が積み上げられていった。本報告では、これらの実践的研究を基礎に、多様で複層的な地域文化をどのように捉え、それをいかに継承していくのかという、21世紀の人文科学における重要な課題について考察した。

4. 関西大学文学部・吾妻重二教授の演題は「日本の漢学塾『泊園書院』—漢学と日本近代を論じる」である。泊園書院とは、江戸後期の1825年、大阪に開かれた漢学塾である。注目したいのは泊園書院から日本の近代的発展を担った人材が数多く巣立っていることで、このことは明治時代になっても漢学がなお大きな影響力を持っていたこと、また漢学は必ずしも近代化の阻害要因ではなかったことを示しているように思われる。講演では、泊園書院について紹

介するとともに、その意義と貢献についても分析した。

5. ベトナム河内国家大学・阮金山総校長の演題は「東アジアの思想上の三教融合、合流の情景—ベトナムを例として」で、ベトナムの思想史上の三教関係を議題に検討した。まず議論は異なる時代の儒、仏、道三教の関係、またその思想文化の構造に関わった知識分子の特徴と位置を論じた。それから三教融合の流れから入って、ベトナム伝統文化の構造に関わる初歩的観点を提出し、論述した。

三 パネル発表の内容

本会議の発表は日本語、中国語、韓国語で行われた。パネル発表は台湾国内、日本、韓国、中国大陸、ベトナムなど海外から有名な学者にそれぞれの専門分野について発表者を組んでいただき、計16パネル、95人の発表となった（海外からの発表者はオンラインで行った）。その構成は下記の通りある。

表1 各国からのパネル発表の統計一覧

国籍	台湾	中国大陸	日本	韓国	ベトナム	合計
人数	76	4	9	4	2	95

表2 論文発表の統計一覧

	パネルの主題	発表論文数
1	アメリカ選挙後の東アジア情勢	3
2	明清の東アジア儒学の経典、礼教と思想の比較研究	4
3	東アジア儒学の経典、礼儀と歴史比較伝統	3
4	新興自由経済下の東アジアの定期労働契約制度の比較	3
5	東南アジアにおける投資政策、業界チェーンの組直し及び法律規範の検討	3

	パネルの主題	発表論文数
6	近代東アジア儒学の人格典型の理論とその変遷	3
7	東アジアの企業経営、リスク管理、経営効率の検討	5
8	海外華人における東南アジア政治経済と文化の変遷	3
9	企業経営と経営効率	3
10	戦時と戦後の再建と東アジアの秩序	3
11	東アジアの民俗学、儒学と文学	3
12	国際政経の新局における東南アジア、サプライチェーンの再建と台湾商業界の対策	4
13	漢字文化圏における東アジア地域の伝播及びその受容	3
14	東アジア経済と効果の評価	4
15	燕行使、通信使とその周辺—東アジア視域下の人、物交流	3
16	東アジア思想の「現地化」研究	3
合計		53

